『探訪紀行』

佐伯惟治没落の日向路を往く

林　寅喜

（会員・佐伯市中の島町）

計画の要旨

私は、佐伯史談会としてはもう随分永い間、途絶えていたと思う佐伯惟治の日向落ちについて、実録とは違った角度、つまり北日向の側から見た惟治の足跡を、現地研修を通して確めて見たいと考えていた。しかし、一知半解でいきなり探訪といったところで、充分な成果が得られる筈もない。そこで先ずは事前学習をして知識を身に付け、然る後現地入りすることとし、その資料作りから始めた。

それには史書や史談をはじめとして、北浦・北川・蒲江の各町村史からも関係した部分を抜粋し、一部には私的見解も加えるなどして編集した。その後現地研修に先立ち、北浦町教育委員会ほか関係者との電話連絡により、次のことを確認した。

(1) 「北浦村史」のコピーをして貰えるということ。
これは高木嘉吉氏（故人）が一部を史談に紹介しているが、是非入手したいと言っていたもの。

(2) 光久寺は現在無住であるということ。
但し、寺は古江昌雄寺の住職大村快雄和尚が管理し、過去帳は預かっているから、来訪の日には檀家総代に託しておくといったこと。

(3) 直海には祠（塚）が残っているということ。
比処も高木嘉吉氏が訪ねたいと書いていた所。

(4) 旧「北川村史」の著者木原義邦氏（故人）が所持していた、惟治着用と思われる小袖（或いは直垂か）の残片と紐は、弥生町の古藤田会員に贈ったということ。

(5) 尾高知神社神官猪又道行氏から、神社関係の古文書類はコピー版が町教委に保管されているということ。

(6) 丸市尾富尾神社神官は先代が死亡したあと、事情があって神社縁起等所持していないということ。

以上の外、学習会には詳しい地図も必要であると考え、こちらは大分前に二万五千分の一を取り寄せておいた。

なお、この目論見に賛同して参加された会員は九人で

ある。

その一、事前学習

大永七年（一五二七）早春、栂牟礼城主佐伯薩摩守惟治は、寄せ手の大将臼杵長景の謀略に乗せられて城を捨て、日向路指して落ちて行った。その経緯についてはこれまで幾多の先輩諸氏によって、「栂牟礼実録」をはじめとする稗史や史書、あるいは現地の調査結果による物的証拠品等挙げて、その都度「佐伯史談」に掲載し発表されてきたが、落城から自刃までの行程と、その期間の整合性等について、一貫した発表は残念ながら未だなされていない。

そこで今回これら諸記録を整理統合して推考し、惟治一行が辿ったとされる落城から自刃までの日向路を旅することによって、多少なり共、昔日の姿に近づくことができればと考え、目論んだ次第である。そこではじめに

一、史書・諸記録から

(1)「栂牟礼実録」

「佐伯史談」四十九号「佐伯氏と栂牟礼城」の中で佐脇貫一氏は、佐伯氏の伝承を伝える唯一の資料は「栂牟礼実録」、または「栂牟礼軍記」と呼ばれる稗史（歴史風の小説）であるが、これは鶴谷外史も指摘しているように、「大友興廃記」をタネ本としたいわゆる軍記で、現在の歴史小説と同じフィクションを含んだ物語であると書いている。

そこでこの疑問を解くため「実録」の記述された時期について調べた。すると同書上の巻九『巴作りの太刀の事』末尾に、『二十一代惟治没落の後、居住栂牟礼続家二十二代惟教、二十三代惟真、二十四代惟定、二十五代佐伯家断絶（惟重）、二十六代惟寿』と書いてあるから、惟寿（三代佐伯権之介〈伊勢・津在住〉）が生存中の元禄三年（一六九〇）までに出版されたことになる。

「実録」の出版された時期について、佐脇貫一氏は延宝年間（一六七三～一六八〇）であったとしているが、事件後百四十年から百五十年経った後、語り部と興廃記をタネ本として書かれたとすれば正史などとは言い難い。

しかし、佐脇氏も言うように、現在のところこれに

匹敵する史料はない。とすれば稗史といえども史的根拠とせざるを得ないが、後世の作者がタネ本と聞き書きによって記述されたものだけに、矛盾点が多い。

(2)「大友興廃記」

寛永十二年（一六三五）勢州人杉谷宗重撰とある。しかし、これも宗麟の没後（天正十五年〈一五八七〉五月）四十八年経った後に撰書されたものだけに、惟治関係に限っても百年後となるため、信憑性に乏しいと言わざるを得ない。

そこで前段落城までの経緯はさておき、後半の落城から自刃に至るまでの期間について、問題点を挙げながら、物理的にも可能であったか検討して見たい。

二、開戦から自刃までの記録

(1) 開戦の時期

・「実録」には

『臼杵近江守長景探題（大友義鑑）の命を請け、総勢二万余騎の人数を引きつれ、明れば大永七年正月府内を打立』とある。

・「興廃記」では

『大永七年丁亥十月上旬に佐伯梅牟礼城へ差向はる』とある。

・「佐伯梅牟礼惟治記」（作者時期とも不明）には

『其後臼杵近江守侍大将トシテ、船中兵ヲ揃エ都合二万余騎ヲ率イテ大永七年正月上旬、佐伯梅牟礼ノ城ニ向フ』とある。

以上から開戦の時期は、七年正月上旬説と十月上旬説とに分かれる。

(2) 落城の時期

・「実録」には

『頃は既月（一と月が終わった後の月）の初めつかた』。また、『佐伯方徊（徘徊）すとも謂つ（討つの意か）べし、寒気防ぐ様なければ何国さして』云々、とあり。

・「興廃記」には

何も記述していない。

・「惟治記」には

『頃ハ六月炎天野辺ノ疲レモ夏草モヨレル暑サ』、とある。

(3) 没年月日

・「実録」『大永七年十一月廿五日佐伯の家滅亡する事』

・「興廃記」『大永七年十一月廿五日に如此なり』

・「惟治記」『大永七年七月廿五日ノ御逝去ナリ』
・光久寺尾高知廟由緒『大永七年丁亥七月二十五日ノ暁ナリ』

とこれも七月説と十一月説の二つに分かれる。

三、戒名・墓碑・祭祀社等

(1) 惟治の戒名

(1)院号　(2)道号（仏法上の言葉）
(3)諱（死後の名前）(4)贈り名（諡）

大光院殿故薩州刺吏悟正徹大居士(1)(2)(3)(4)……西野古塔
大知院殿前薩州刺吏惟治正徹大居士(1)(2)(3)(4)……切畑射場の墓
薩州大守大機正徹居士(2)(3)(4)……鴟尾権現由来記
従五位下朝散大夫前薩州大司惟治(1)(2)
大機正徹大禅定門(3)(4)……黒沢富尾権現社
章徳院殿前薩州刺吏大機正徹(1)(2)(3)
大禅定門(4)……光久寺位牌
大知院殿法慚正徹大居士(1)(3)(4)……西条市坂本の墓

(2) 石碑・墓碑の没年月日

大永七丁亥十一月念五日……西野古塔
大永七年十一月二十五日……切畑射場の墓
大永七年七月廿五日……光久寺位牌
大永七丁亥七月廿五日……西条市坂本の墓
大永七丁亥冬十一月廿五日……西野大神氏墓碑

(3) 惟治を祀る神社

・佐伯十社

富尾神社……青山黒沢　富尾権現……直川村横川
富尾神社…蒲江町丸市尾　飛尾権現……弥生町大坂本
富尾権現…直川村上直見　権現（星宮）……鶴岡脇
富尾権現……海崎山ノ口　此花咲栄神社……堅田石打
富尾権現……直川村赤木　社名不詳……弥生町江良

・宇目二社

鴟尾神社……宇目町大原　鴟尾神社……宇目町千束

・宮崎県内六社

鴟尾神社……北浦町梅木　鴟尾神社……北浦町古江
ほか四社

四、縁起・遺品・資料・其の他

(1) 「富尾神社縁起」　佐藤蔵太郎著「新佐伯」より

大永七年佐伯惟治栂牟礼を出で、日州三河内を指して落つる時、主従の人数僅か二十余人に過ぎず、蒲江浦丸市尾越田尾に行き、漁夫頭市右衛門という者に、

名護屋崎より土佐国に渡してくれよう頼みしも、市右衛門これを承諾せず、惟治主従此の鼻に足摺して残念がりしも詮方なく、又日州に向い、翌日三河内の内尾高知に於て、敵将新名治左衛門のために討たる。

惟治の遺霊丸市尾に崇り、種々奇怪あれば、村人大いに恐怖し、鎮守の神と祝い祭りてこの社を建てしという。

（註）名護屋崎―越田尾から突き出た半島の突端。

此の鼻―地名か？

翌日三河内の尾高知に於てとあるが、越田尾から浦の迫に出て張弓峠を越え、葛原から津島畑山（五〇六・二メートル）に登り、尾根伝いに陣ケ峰（四三一メートル）を経て尾高知に至るルートを辿ったとしたら、その距離凡そ九～十キロ（添付図参照）であるから、一日の行程として不可能ではなかったと思う。

したがって、この縁起を軸として考えると、尾高知には仮の陣を構えたか、あるいは待ち伏せされていたことになる。

(2) 三川内光久寺の位牌と惟春公真像

位牌

正宗山光久寺

肖像

（佐伯史談五号　古藤田太氏記事より）

抑々佐伯栂牟礼ノ城主佐伯薩摩守惟治公ハ御歳参拾参歳ノ時キ大友義鑑ノ為メニ討死被成タレドモ其ノ魂魄精霊ハ猶々依然トシテ宇内ニ充満シ縁ニ隨ヒ感ニ應ジテ普カザル事無シ故ニ祈祷アレバ必ズ感應ヲ蒙ラシム是神功ノ法々トシテ聖徳ハ昭々タル所以ナリ然ルヲ似テ四方□信諸□ノ依願一トシテ成就セザルヲ聞カズ真ニ専ラ蒼生ヲ憐ミ玉フ御遺徳ノ実証ナル欤

謹拝

明治廿四年二月十五日

宮崎県日向国東臼杵郡北浦村大字三河内光久寺住職

(3) 過去帳（佐伯史談五号　古藤田太氏記事より）

章徳院殿前薩州刺吏大機正徹大禅定門

右豊後国佐伯領主大永七丁亥秋七月当郷於尾高知山而

生害矣　天文二年癸巳勧請而崇郷中ノ鎮守鵜尾大権現
別記在神家矣

(4) **尾高知廟の明細表**（四・（3）に同じ）

光久寺末尾高知廟
本尊佐伯薩摩守惟治公石碑並びに由書
抑々豊後国修理大夫大友義鑑朝臣旗下佐伯栂牟礼城主
佐伯薩摩守惟治公ハ大友義鑑朝臣ト不和ヲ生ジ大友朝
臣臼杵遠江守ニ命ジ之ヲ討タシム惟治公数度ノ防戦ニ
敗レ堅田谷ヲ降リテ日向国ニ去リ所々ニ隠住ノ後此ノ
地ニ在リシヲ長景ノ知ル処トナリ新名治太夫ニ追討ノ
命ヲ下シ多勢ヲ似テ之ヲ討タシム惟治公主従僅カ二五
人ニテ近従ノモノ防戦ノ内惟治公自殺ヲ遂グ其ノ臣汐
月三河守主君ノ首ヲ斬リ我ガ腹中ニ蔵シテ死ス時ニ人
皇第百四代後奈良天皇ノ御宇大永七年丁亥七月二十五
日ノ暁ナリ時人死屍ヲ此ノ山に葬リ殆ド塵中ニ埋没セ
リ然ルヲ天正（天文の書き違いか）二年ニ至リ光久寺
三祖守養長老石碑ヲ改造シ霊廟ヲ建立シ血脈ヲ授与シ
法号章徳院殿前薩州刺吏大機大禅定門ト謚ス爾来日向
豊後ノ人民父母ノ慕ウ如ク時々参詣シ農夫ハ四時ノ穀
物野菜ヲ献ジ家内及牛馬ノ安全ノ肖像ヲ彫刻シ同廟ニ
石碑ト肖像トヲ配置ス而シテ墓石ハ安政年間ニ改造セ
シモノナリ爾後明治十八年ニ霊廟ヲ改築ス毎年正月十
五日ヲ似テ光久寺

（以下欠落して読めず）

（註）右のうち位牌と真像並びに由緒（書）は、真像に書いてある日時明治二十四年二月十五日に、同時に納められたものと考えられ、何れも原本かこれにかわる何かがあってのことであろう。
過去帳については現地研修により確認した上で、詳しく報告することとしたい。

(5) **御頭神社縁起**

北川村史にはここの祠の中に石碑があり、古いものを新しく復原してあるが、それには『天地院殿先薩正慶血大居士霊位』とあって、傍らに大永七年七月廿五日と刻まれているという。
縁起は現地研修の項で写真により紹介

五、研修の課題（落城後の足跡）

(1) 「実録」によると

落城後城を出た主従二十余人は、竜護寺に一泊し、

翌日黒沢の弥四郎方に一時身を寄せたが、村里にいては敵方に情報の漏れるを恐れて、馬場の尾という所に笹葦きの小屋を建て、餅原・野々下・坂下などの家来を、情報収集のため派遣したが、成果のないまま月日を送ったとしているから、ある程度の日数は費やしたと思う。そのあと石神を越えて三川内に出て、尾高知に拠ったというのが「実録」の概説である。

(2)「興廃記」には

黒沢という所にて多田弥四郎が娘若狭から馬上にて水を受け、三河内に越えて「おたかて山」という所に暫時休息したと、こちらは至って簡略である。

(3)「蒲江旧町史」には

黒沢から三川内を目指したが、既に大友の手が回っていたため、丸市尾に出て伊豫に渡ろうとしたが断られ、高千穂の三田井氏を頼って出発したがこれも果たせず、尾高知で自刃したとある。

(4)「北浦村史」(佐伯史談六十一号高木嘉吉氏紹介)には

五百余騎を率いて栂牟礼を立ち、北浦から南下して可愛岳に拠ったが、長法(長景)に攻められて敗退し、三百余騎で北上して尾高知に陣取ったところを、再び長法軍に攻められ、反撃に出て激戦を展開し、一段落したところで再会を約して家来達を落ち行かせ、塩月三河以下五人を手元に留めて、高千穂の三田井氏を頼って出発しようとしたが果たせず、新名党に襲われて自刃したとしている。

六、研修の課題(落城と自刃の時期)

(1) 落城の時期

・落城を二月上旬とすれば、二十日程度の短期決戦となるが、六月落城(惟治記)となれば五ケ月にも及ぶ長期籠城戦となる。したがって、その間に大友方で不穏な動き(惟治は菊地義国・星野親忠と気脈を通じていたとされる〈歴代鎮西要路〉)があれば事は重大である。また、事実五ケ月にも及ぶ長期戦であったとすれば、他の史書に残る何かがあってもよい。

・「興廃記」にしたがえば、落城から自刃まで一ケ月足らずであるから、経過から見て最も信憑性は高いがそれはどうか?

・「中世佐伯氏の歴史」によれば、無念の最後を遂げたのは大永七年十一月二十五日と伝えられるから、栂牟礼

落城は十月上旬から十一月中旬までの間となる。とした上で、大野郡清川村の久保氏に伝わる大友義鑑感状を掲載している。

佐伯惟治成敗の刻、彼の城攻め口に於て疵（負傷）せられ、忠節感悦に候、必追而一段と賀し申す可候

恐々謹言

十一月十三日（大永七年）　　義鑑花押

久保中務丞殿

（大分県資料久保文書）

これによると、十一月十三日に感状が出ているから、この前後に落城したわけで、惟治はこの頃黒沢の山をさまよっていたことになる。と書いているが、いまだ消息不明であった筈なのに、早々と感状を出したであろうかと訝しく思う。

(2) 自刃の時期

・落城二月上旬自刃七月二十五日説

逃亡期間五ケ月、日向路から見た足跡と経路を考えると、史実に近いかも知れない。

・落城二月上旬自刃十一月二十五日説

「北浦村史」を信ずればこれ位は耐えられたかも知れないが、九ケ月もの長い間、県松尾城の土持氏が見て見ぬ振りをしていたか。

・落城六月自刃七月二十五日説

これは「惟治記」だけのものであるが、黒沢で喉の渇きを訴えたという件は、夏場の方に説得力がある。

・「興廃記」説は物理的に見て整合性に富むが、簡略すぎて記述不足の感がする

七、研修予定地

・富尾神社…蒲江町丸市尾

・光久寺……三川内梅木…位牌と過去帳と真像他

・鵜尾神社…三川内梅木…天文二年勧請惟治の霊を祀る。

・直海の祠…惟治に従って戦死した家来を葬ったという。

・尾高知廟…（自刃の地）……墓碑と遺物等

・在上塚……三川内上塚…惟治妻子の首塚という。

・在下塚……三川内下塚…同じく胴塚という。

・御頭神社…北川町瀬口…惟治の首塚という。

右のうち、直海の祠と上塚・下塚は、これまでに会員が訪ねたという記録はない。

八、羽柴弘氏の見解

・羽柴氏は惟治の日向落ちについて、次のように推測している。（佐伯史談五号）

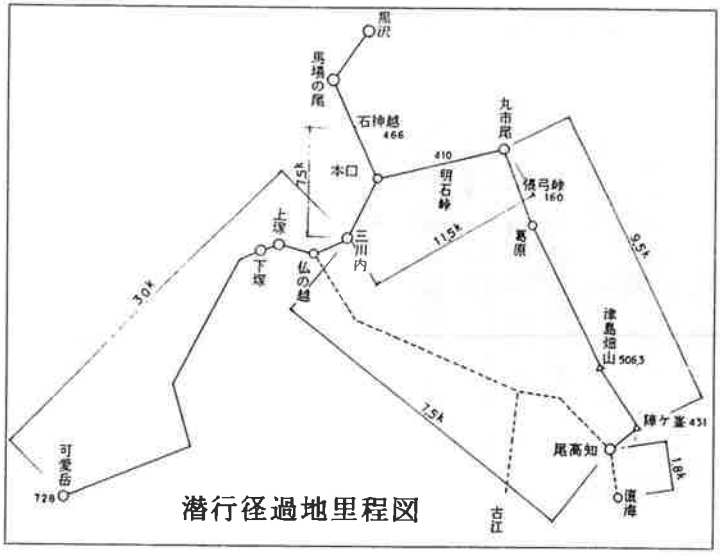
(1) 黒沢から石神峠を経て三川内に下り、梅木あたりで強い抵抗に合い東に向かって谷を上り、明石峠に出た。

(2) 丸市尾に下り四国に渡ることを企画したが、越田尾の漁師舟を出さず、止むなく葛原を経て山路を辿り陣ケ峰あたりに達したであろう。

(3) ここで使臣を直海に下らせ、再度四国または南九州に落ちることを計画したが果たさず。

(4) 三河内勢の探索きびしく糧食はつき、その包囲に遇い万策つき、進退きわまって水のある尾高知山の谷間（決して峯でなく）で最後を遂げた。

以上により四月二十六日参加者全員による学習会を開き、意見交換を行って集約した。結論は過去帳と位牌を確めることが先決ではという意見の一致を見た。そして出発を五月十五日と決め散会した。



潜行径過地里程図

その二、現地研修

五月十五日参加者九人、佐伯体育館前に集合して出発は九時丁度、三台の車に分乗して轟峠を越え蒲江町に入る。

折角の機会ということから、猪串浦を回り九紋龍記念碑を見て、彼が子供の頃運んだという、辨天島の厳島神社参道に組まれた石段を見上げながら、改めてその怪力に驚嘆した。

丸市尾では地区外れの山裾に鎮座する富尾神社に参拝、神職不在のため由緒は拝見出来なかったものの、惟治主従がここに野陣を張り、使いの者を越田尾に遣わし、報告を待つに相應しい場所であったと痛感した。

丸市尾からは葛原を通り、広域農道を走れば三川内は近い。梅木では前もって連絡しておいた通り、檀家総代さんが案内してくれた。

光久寺は小高い丘の上にあり、山門へは高い石段を上がらねばならない。その右寄りにある梵鐘は由緒あるものらしく、町指定文化財となっている。本堂は間口八間で、奥行きは六間位、建物は古いが庫裏は最近の建築である。早速本堂に上がって祭壇に手を合わせ、過去帳を拝見した。しかし、これは明治以降になって、祥月命日によって仏が分かるように、日捲り式に書き替えられたもので、記載された内容は、昭和四十年代に調査した会員諸氏が、佐伯史談に発表したものと同じである。

過去帳に記載された年号は、寛文年間（一六六一～一六七二）前後からのもので、惟治の大永七年だけが突出して古い。しかし、別葉には書写した原本があったと明記しているので、惟治の欄とも合わせ、該当する記述があったということは疑う余地もない。

過去帳部分　（光久寺）

ここで私が注目したのは、「天文二年癸己勧請」という件である。天文二年といえば、大永七年から僅か六年しか経っていない。これは、仏法にいう七回忌法要の年に当たる。この時鴟尾神社を勧請して惟治の霊を祀り（北浦村史）、光久寺由緒には三祖守養和尚が石碑を改め、霊廟を建てたとしているから、惟治の自刃した月日を間違える筈はなかったと思う。引き続いて位牌と真像を探したが、どうしても見つからず、総代さんも知らないと言う。

光久寺は内陣の両側と後側が位牌堂となっていて、位牌が多く安置されているので、全員で隅々まで探したが、残念ながら見つからなかった。勿論それは庫裏の方も同じである。総代さんの話では、九月頃後任の住職が入山し、秋には位牌堂の修理をするから、その際よく注意しておきます。と言うことであった。晩秋には是非もう一度訪ねたいと思っている。

光久寺をあとにして、少し離れた鴟尾神社に参拝し、そのあと北浦町教育委員会へ行って、訪問の挨拶をした。担当者は出張中であったが、事前の電話連絡によって手配しており、北浦村史は一冊頂き、尾高知神社々家の古文書はコピーしてくれた。また、直海の祠については案内者の家を教えて貰い、教育長に挨拶したあと、直海に向かって出発した。

直海では偶然にも書食を摂った場所が案内してくれる藤沢さん宅の前ということもあって、万事都合よくいった。祠は休耕中の畑の片隅にあり、塚は約一間四方を低い石垣で囲み、傍らには株の張った雑木が一本立っている。今は訪れる人もなく、周囲は雑草で埋もれていた。

鴟尾神社

ここには尾高知で死んだ家来達を埋葬したという言い伝えがあり、地形的にも尾高知から登りつめた尾根の真下に当たり、その距離凡そ一・五キロで遠くはない。途中の谷合いを腸打ち谷と言い、血路を開いて尾根にたどり

着いた家来が、切腹して腸を掴み出し、谷に向かって投げ捨てた所から付けられたと言い、惟治主従と全く関係がないとは言い難い。

ここは高木嘉吉氏（故人）が是非訪ねたいと書き残していた祠だけに、夢が叶えて嬉しかった。それは案内者なしでは到底探し得ない場所だからである。

見学を終え、藤沢さん夫婦に感謝の辞をのべて直海を後にし、惟治終焉の地尾高知に向かう。途中の道は坂ありカーブありで、直海からは大分遠い。しかし、388号のバイパス古江トンネル手前から入れば、それ程遠くはない。道は旧道（388号）分岐点から、神社までは専用道のようである。終点に駐車場があって、そこからは幅一・五メートル程の山道が続く。その距離凡そ二、三百メートル、惟治自刃の地には、

直海の祠

尾高知社と並んで左側に天満社があり、手前の谷川には清水が流れている。惟治の墓石は天満社の建物の内にあるが、文字は風化して読みとれない。霊魂の碑は、尾高知社の右に少し離れてあり、ブロック造の覆い屋で囲われている。

尾高知から再び三川内に下り、仏の越から左に進路を取って、上塚で民家に立ち寄り案内を乞うたところ、幸いにもその家の御老人（名前を聞かずに失礼しました）が事情に詳しく、先に立って案内してくれた。場所は今の県道から少し上がった小高い丘にあり、昔はそこが上塚の往来であったと言い、

惟治の墓（尾高知）

惟治霊魂の碑（尾高知）

下塚の庚申塔

一石一字塔
（上塚仁王塚）

庚申塔と並んで一字一石塔が立つが文字は風化して読みとれない。地元では仁王塚と呼んでいると言う。説明によれば、

惟治の妻子（惟治には千代鶴の外に二人の娘があり、姉は三河守に嫁いだとするが、妹の方は不明である。）の首を埋めた所と言い、一石塔は追善のため後世の人が建てたのではないかと言う。今は昔の面影など何も止めてはいないが、地形上から見て、U字形に突出した山鼻を囲むようにして奔流する小川（一級水系）の川岸を避け、安全な丘陵地を横断して往来していたと聞けば理解できる。

下塚は県道脇に庚申塔が立っているから、すぐ分かると教えてくれた。そこには庚申塔以外の石碑はなかったが、妻子の胴体を埋めた所と伝えられており、北浦村史にも書かれている様に、地名から考えて両地区共、否定する訳にはいかないと思う。以前ここの地主が大刀を掘り出したことがある。とか言っていた。

研修の最後は北川町瀬口の御頭神社である。車は下塚より十号線に出て、市棚から左折すれば瀬口中学は近い。神社は中学の後、山の窪地にあって目につきにくい。

御頭神社由来記

惟治霊魂の碑（御頭神社）

宝塔（御頭神社裏）

今は小さな社が建ち、中には「天地院殿先薩生慶皿大居士霊位」「大永七年七月廿五日」（写真参照）と刻字された石碑が祠られているというが、私は裏に立つ宝塔（宝篋印塔）に目を惹かれて、残念ながら見落としてしまった。この塔は北川村史では隅飾突起がないので宝塔であるとしているが、突起は欠けた跡のようなものが見られ、笠部の露盤も六枚ついているから、宝篋印塔ではないかと私は思う。現在新百科事典によれば、我が国では鎌倉時代以降墓石として用いられたとするが、この塔は、惟治と直接関係するとは思わないけれ共、前記のように、社の中には霊を祀る碑が

あることから、間接的な関係があったと考えられないこともない。それは尾高知から上塚・下塚そして可愛岳と結べば、ここは通過地点の一つになるからである。

§　§　§

その三　研修のまとめ

研修が終わって北川村史を丹念に読み返し、事前学習の資料と照合しながら、六月九日には土持氏の居城松尾城趾にも行って、持論をまとめた。それはこうである。

(1) 手勢を率いて栂牟礼を後にした惟治は、その夜龍護寺付近に野陣を張り、篝火を焚いて一夜を明かした。これは決して敗北ではないという意思表示と、臼杵方へ対しての牽制もあったろう。

(2) 翌日黒沢に着いて何日か逗留し、兵糧の調達をする。

(3) 馬場の尾に仮の陣所を構え、栂牟礼をはじめ三川内方面まで探索する。

(4) 石神を越えて三川内に出たあと、諸方の探索をしながら万一に備えて可愛岳（七二八メートル）に拠り、和戦両様に構えたものの、赦免の沙汰も空しく日時を費やし、再び長景軍か新名党に攻められて兵糧も底をつき、やむなく伊豫への脱出を図る。

なお、可愛岳と土持氏の居城松尾城までは、間に祝子川の奔流を挟み、直線距離にして　七・五キロと近いが、土持氏に惟治を攻める意思はなかった解している。その理由として、

① 落武者の惟治に、領地を奪う程の兵力は持っていなったということ。

② 当時南日向で勢力を拡大しつつあった伊東氏との間に、武力闘争を繰り返していたこと。

③ 惟治討伐に向かった吾田（県）の新名党は、長景の内命によって一行を襲ったのであり、土持氏の指図に基づくものではなかったと考えられること。

の三つである。

(5) 捲土重来を約して手勢と別れ、（或いは逃亡されたかも）供廻りだけ連れて丸市尾を指して落ちて行ったが、途中下塚付近では妻子を討たれ、渡船は断られて伊豫への脱出を断念する。

(6) 葛原から津島畑山に登り、陣ケ峯に下って直見から再度渡海せんものと、水を求めて尾高知に潜んだ。しかし、長途の潜行では、携帯の兵糧にも限度があ

り、焚火を用いる場合もある。したがって、この煙により追手に居場所を嗅ぎ付けられ、包囲されて萬策つき、痛恨の怨みを抱いて自刃したものと推測した。

序でながら落城の際、惟治に従ったとされる家来達について、これも私の持論を述べて見たい。

実録では主従二十余人であったとしている。しかし、これはどう考えてもおかしい。何故ならば、惟治は誓紙血判の約定によって城を空け渡したわけで、決して降伏したのではない。とすれば負け戦で追い詰められた場合と違い、武将の面目にかけて堂々と振舞った筈である。恐らく妻子を初め、二十余人の家来（騎馬武者クラス）に雑兵と陣夫役等加えた、少なく共百人か百五十人位の手勢を引き連れて、城を後にしたのではないか。惟治は落城後状勢の如何によっては、死を覚悟せねばならぬこと位、心得ていた筈である。その時頼りになるのは、何と言っても手勢であるから、二十人やそこらの少人数で落ちて行くなど、倒底考えられない。ところが、結果は一郷士の反逆によって悲運な最後を遂げたため、興廃記や実録では落城から尾高知までの行程を、当初から負け戦の延長としてとらえ、策なきは斯くもありなんといった表現に終止している。

これに対し惟治記では威風堂々の退城であったと書いている。

次いで、当時北日向における在地武士団の勢力分野を、延岡市史及び他の資料によって調べて見ると、県と呼んでいた今の延岡地方は、建武の争乱時に、北朝方についた恩賞として土持氏に与えられ、その居城は暦應二年（一三三九）以降に築かれたという井上城から、西階城を経て文安三年（一四四四）、松尾城（西延岡駅北西）を築いてこれに移り、天正六年（一五七八）大友氏に滅ぼされるまで、約百三十年間続いている。

松尾城は南に五ケ瀬川を望んで水田地帯が広がり、後方を祝子川の奔流に囲まれた標高六〇メートルの山城である。土持氏がここに城を築いた理由は、建武二年（一三三五）足利尊氏の命によって都於郡に下向して来た、伊東氏の勢力拡大に備えての築城であったという。この土持氏と佐伯氏との間では婚姻によって結ばれ、誼を通じた時代もあった。

一方、北浦村史によれば平安時代（七四九ー一一八五）に入って、北面の武士（院の御所の北面を警護していた

武士）木原玄蕃守重正が、一族郎党を引き連れて古江に下向し、郷士として代々土持氏に仕えたといわれ、一時期には佐伯庄大神氏の配下となった時代もあるが、天正以降は神職を本官としたという。

また、三川内には鎌倉時代（一一九二～）初期の頃、甲斐右京・左京・猪又中六・小田小兵衛の四人が下向して、梅木・歌糸・小長谷・市尾内等を給地として守り、天正年間迄続いたという。三川内は豊後と国境を接した山間僻地でさしたる産物などない上、当時伊東氏との争いに明け暮れていた土持氏にとって、北日向は最も手薄な地域として、惟治の日向入りを容易（たやす）くした要因とも言えよう。それは惟治自身が心得ての行動であったかも知れない。

松尾城趾

§　§　§

研修を終わって感じたことは、惟治に対する見解が、佐伯と北浦では、大きく違うと言うことである。それは実録や県廃記を読んで見る限り、北日向における惟治の行動については、曖昧模糊とした部分が多い。これに対し北浦町には、関係した土地に伝説が今も伝えられ、物的証拠品とも言えるものさえ、数多く残されている。にもかかわらず実録や興廃記共、余りにも簡略に扱いすぎているからである。もし作者が記述に当たり、尾高知の墓碑や光久寺の由緒など調べていたら、肝心の自刃月日まで間違えることなどなかった筈である。それは今回の研修を通して、また、贈られた北浦村史を読んで、痛切に感じた次第である。